

現代中国書面語における日本語由来の虚詞

武信 彰

Chinese function words coined in Japanese-Chinese translation

TAKENOBU Akira

本文将汉语译文及日语译文跟英语原文对照一下而分析了以“于”为后缀的介词如“关于、对于”的使用情况。我们通过这个分析得到一个证实，以“于”为后缀的介词不是汉语意义词而是日语外来词而后缀“于”就是日语动词的介词化的手段的可能性。

0. はじめに

王彬彬(1998)が“日本“汉语”，冲击着东亚各国的语言系统，当然也大量进入中国的汉语中，成为中国人日常语言的重要组成部分。”と慨嘆して述べるように、近代において中国語に流れ込んだ日本新漢語が、単に量的に多かったと言うにとどまるものではなくて、欧米の文明を受容する勢いをそのまま受けて、現代中国書面語の成立に関わるものであったという認識はいまや広く共有される場所である。もともとは東アジアの人々にとって新しい概念であり術語であったであろうけれども、現在ではそれなしではコミュニケーションにも支障をきたす基本的な抽象語彙の裾野を形成している。

日本語に由来する中国語のこの種の外来語は、高名凱・刘正焱(1958)にすでにまとまった形で収められてはいるけれども、王彬彬(1998)が世の関心を喚起したように、当時から今日にかけて関連の研究報告はいよいよ盛んである。ただ、扱われるのは大抵が新しい概念に与えられた術語に絞られる。そして、それらの来歴を問う姿勢はややもすると日本語由来である、いや出自は中国にある云々といった大筋を見失った議論に迷い込んでしまう。本稿が目する、術語ではなくて文体に関わる用言、すなわち中国語に入って虚詞となる新語については、あっさりとこれらを外来語ではないと断じて斥け、研究対象から外されてしまっている、というよりも無関心のまま捨ておかれている感を否めない。

1. “～于”型の介詞

1.1 日本語からの借用語ではないとする説

王立達 (1958a) は日本語からの借用語についていわば手始めの分類を試み、9分類する中、第7類として“基于、关于、对于、由于”等の“于”を接尾辞にとる介詞と“认为、成为、视为”等の“为”を接尾辞にとる動詞とを取り上げ、日本語翻訳に当たって造られたものであるとしている。

下面一些现代汉语词汇，是在我国人翻译日文时创作出来的。

- 1) 基于 (〇〇ニ基イテ)
 - 2) 关于 (“〇〇ニ関スル” 或 “〇〇ニ就イテ”)
 - 3) 对于 (〇〇ニ对シテ)
 - 4) 由于 (〇〇ニ由ッテ)
- 以上为词尾是“于”的介词。
- 5) 认为 (〇〇ト認メラレテ)
 - 6) 成为 (〇〇ト成ッテ)
 - 7) 视为 (〇〇ト視ナシテ)

以上为词尾是“为”的动词。

しかしながら、この王立達 (1958a) の指摘に対して、張应徳 (1958) が直ちに異議を唱え、第7類はそもそも借用語の中に含めること自体が不適切であるとしている。

至于“下面一些现代汉语词汇，是在我国人翻译日文时创作出来的”，我也不同意。例如，“关于、由于、认为、成为”等词，就不是从日语借来的，正如王文所说，这词既然是我们“创作出来的”，当然就谈不上“借”了。

王立達 (1958b) はこの反論に屈し、“意译词”であって借用語に含めたのは誤りであったと認めている。

例如张同志认为“关于”、“由于”…等不应当看作是日语借词，这一点我完全接受。因为这些词从来源上说虽然与日语有直接关系，但因它们是我国人翻译日文时创制出来的，而不是从日语中借用来的，所以按其性质来说，应

当是意译词而不是外来词。我把它们列为日语借词的一项，是完全错误的。

张应德（1958）は中国人側で創ったのであるから外来語ではないと言い、王立达（1958b）は、出所は日本語と直接的関係をもつが意識語であって外来語ではないと言う。両者の見解を総括すれば、出所となる日本語を中国側で意識したものであるので、外来語ではなくて中国語の語彙と見做すべきであるという主張になろう。

そもそも中国語にとって外来語とはいかなるものなのか、とりわけ同じ漢字で表記される日本語語彙を相手にした場合には、その仕分けが甚だ曖昧である。例えば“哲学” / 「哲学」, “民主” / 「民主」, “劳动(労働)” / 「労働(労働)」をすんなり外来語と認定する根拠はなんなのか。“劳动(労働)”は別として、“哲学”, “民主”は「形・音・義」のうち「形」を同じくし、新たに「義」を貰い受け、「音」は当然異なる。意識ではないけれども、かといって音訳でもない、文字通り借りてきて用いる、すなわちその経緯に基づいて認定しているわけである。これらは「音」を日本語に近づけると外来語から外国語に移行する。

ならば、誕生の経緯を同じくする王立达（1958a）の第7類を同じく外来語として遇してもよさそうなものだけれども、上述のようにそれは認めようとしない。意識と言うけれども、実は接尾辞をつけて介詞の働きをなすべく調整しているにすぎない。“劳动(労働)” / 「労働(労働)」にしても、実際には“劳动(労働)” / 「労働(労働)する」であって、「する」を取って移入しているわけであるから、つけ加える方だけをその手順をもって外来語としての資格を奪うのは不当であろう。例えば、日本語において動詞化や形容詞化の手続きを理由に「サボる」, 「サービスする」や「オーソドックスな」, 「ハスキーな」等々を外来語から外すとしたら大きな違和感を覚えるに違いない。¹

“基于、关于、对于、由于”は、「…に基づいて」「…に関して」「…に対して」「…に由って」の「基(づく)」、「関(する)」、「对(する)」、「由(る)」を漢字の「形」・「義」そのままに取り入れて、それに接尾辞“于”を加え介詞として借用した日本語由来の外来語であると捉える方がよりバイアスから自由な理解であると言えよう。

1 「する」をつけて動詞化する外来語については澤田田津子（1993）を参照。

1.2 外国語の翻訳一般への使用

日本語翻訳に当たって造られたものであるという王立達（1958a）等の証言を受け入れれば、翻訳文体における活用の広がりについて検証しなければなるまい。日本語の翻訳に限ることなく外国語の翻訳一般に広く働いてこそこの種の介詞を保持する利益があるからである。

武信彰（2010）の指摘の通り、英文契約書の頭によく見られるWhereas Clause（Whereas条項）を翻訳するとき“于”を接尾辞にとる介詞の一員である“鉴于”が必要となる。

契約書や合意書などの前文の先頭に用い、締結の理由・根拠を示す英語のwhereas（なるがゆえに、…という事実からみれば）に対応するのも、この“鉴于”である。

Whereas Party B has the right and agrees to grant Party A the rights to use, manufacture and sell the Contract Products of Patented Technology;

Whereas Party A desires to use the Patented Technology of Party B to manufacture and sell the Contract Products;

The Representatives authorized by the Parties to this Contract have, through friendly negotiation, agreed to enter into this Contract under the terms, conditions and provisions specified as follows:

鉴于乙方有权并同意将专利技术的合同产品的使用权、制造权和销售权授予甲方；

鉴于甲方希望利用乙方的专利技术制造并销售合同的产品；双方授权代表经友好协商，同意就以下条款签订本合同：

“鉴于”の翻訳上の用途がこれだけに限られるものではないのは言うまでもないけれど、この例だけからでも“～于”型の介詞の翻訳に際しての対応力の高さを窺うことができる。

1.3 “的”のみが負担する修飾語の処理を下支えする働き

“～于”型の介詞が“为”を接尾辞にとる動詞とともに日本語翻訳に当たって造られたものであるとの当初の指摘は、意識であるので外来語ではないという結論に落ち着いたとはいえ、日本語からの翻訳・重訳が大量になされた過程を忘却の彼方としない世代に属する学者の実感からきているであろうことは確かである。太田辰夫(1958)も「《對》《對於》《關於》が関連するものを示す用法はきわめて新しいらしく、清代までの用例を検出しない。」と、これらが現代書面語に新たに加わったものであることを検証している。

“～于”型の介詞がこれまでにはない形式でこの短期間にまとまって出現し、従来の介詞類にあたかも接ぎ木でもするかのように加わっている上に、論理性に注意を払うまでもないごく簡単な受け答え等にはその使用がすぐわないという特徴に注目すれば、近代に誕生した新文体たる中国現代書面語の一角を埋めておよそ1世紀を経たといえどもその役割が大きく変わっているようには見えない。事実、中国現代書面語の確立に伴い一文の中に複雑な論理構造をし得るようになったことと裏腹にはほぼ“的”のみが負担する修飾語の処理に無理が生じ、“～于”型の介詞が下支えすることを求められている。

“病句”としての「長すぎる」文がどの程度までをその範囲とされているのかは判然としないけれども、晦渋で噛みこなせない文と置き換えて理解をするならば、論説文一般に広く見られるし、とりわけ翻訳文となるとその傾向が強い。“病句”としての「長すぎる」文に“的”が多すぎることについては、“病句”の書き換え指導から明らかであるが、実際の翻訳に当たっては、“的”が削りきれない一方で“～于”型の介詞の活用が目立つ。²

削りきれない“的”を多く抱えた文の中で“～于”型の介詞がいかなる働きを担っているのかを、“关于”と“对于”に焦点を当て少しく考察を加えてみたい。

2 武信彰(2014)。

実質的統語普遍性に関する代表的な陳述としては、いかなる文法も名詞 (Noun), 述語 (Predicator), 文 (Sentence) のような範ちゅうを必要とするが, その他の文法範ちゅうおよび素性は, 言語が異なればそれに応じて備えられる, というライオンズの主張がある (1966, pp.211, 223)。

关于实质性的句法方面的普遍现象的一种代表性论点是莱昂斯的见解 (Lyons, 1966, pp. 211, 223), 他认为每一种语法都需要诸如名词, 谓语, 句子这样一些范畴, 但是其他语法范畴和特点在不同的语言中可以有不同的安排。

13

Findings which may be interpreted as suggesting answers to our third question are found in the 'markedness' studies of Greenberg (1966) and in the so-called implicational universals of Jakobson (1958a).

われわれの第三の疑問点に対して解答を示唆していると思われる発見は, グリーンバーグ (1966) による「有標性」 ('markedness') の研究と, ヤコブソン (1958) の, いわゆる含立普遍性 (implicational universals) である。

格林伯格 (1966) 关于“标记性” (markedness) 的研究和雅可布逊 (Jakobson, 1958) 关于所谓隐性普遍现象 (implicational universals) 的研究可以理解为对我们的第三个问题提出答案的研究成果。

19

In the past, research on 'case' has amounted to an examination of the variety of semantic relationships which can hold between nouns and other portions of sentences; it has been considered equivalent to the study of semantic functions of inflectional affixes on nouns or the formal dependency relations which hold between specific nominal affixes and lexical-grammatical properties of neighboring elements; or it has been reduced to a statement of the morphophonemic reflexes of a set of underlying 'syntactic relations' which themselves are conceived independently of the notion of 'case'.

過去において, 格に関する研究のいきつくところは, 文中の名詞とその他の部

- (8) He hit the ball. 〈彼はボールを打った〉
- (9) He received a blow. 〈彼は打撃を受けた〉
- (10) He received a gift. 〈彼は贈り物を受けとった〉
- (11) He loves her. 〈彼は彼女を愛する〉
- (12) He has black hair. 〈彼は黒髪である〉

在原则上，没有理由为什么传统的关于格的用法的研究不包括这样的分类内容，如以下例8到例12所代表的“表示施事的主格”“表示受事的主格”“表示受益的主格”“表示受影响的人的主格”“表示有关人物的主格”（或者也可以称为“表示关系到人的主格”）。

- 8. He hit the ball. (他打中了那个球。)
- 9. He received a blow. (他挨了一拳。)
- 10. He received a gift. (他收到一份礼物。)
- 11. He loves her. (他爱她。)
- 12. He has black hair. (他有 [=长的] 黑头发。)

58 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99

The confusion of criteria in treatments of the uses of cases has been documented by de Groot (1956) in his study of the Latin genitive. / Uses of cases are classified on syntactic grounds, as illustrated by the division of uses of the genitive according to whether the genitive noun is in construction with a noun, an adjective, or a verb; on historical grounds, as when the uses of the syncretistic Latin ablative case are divided into three classes, separative, locative, and instrumental; and on semantic grounds, in which there is a great deal of confusion between meanings that can properly be thought of as associated with the case forms of nouns, on the one hand, and meanings that properly reside in neighboring words.

格の用法の取り扱い規準の混同については、ド・フロート（1956）が自分のラテン語属格の研究の中で考証している。／すなわち、格の用法を分類する根拠には次のものがある。／属格名詞が名詞、形容詞、動詞のどれと構造をなしているかによって属格の用法を分類するような統語論的な根拠、融合的なラテン

語奪格の用法を分離格と所格と助格の三種類に分類する場合の歴史的な根拠、名詞の格形と結びついていると考えてよい意味と、隣接語に存在していると言ってよい意味との間では混乱が非常に多い意味論的な根拠、以上の三つである。

在处理格的用法时使用标准方面的混乱现象，德·格鲁特（Groot, 1956）在他关于拉丁语属格的研究中已经引证列举过了，格的用法有的是根据句法理由来分类的，用作说明的例子是根据属格名词时和名词，还是和形容词，还是和动词出现在同一结构中而区分不同的用法；有的是根据历史因素来分类的，如拉丁语已经混而唯一的离格（ablative）的用法分为三类，即表示分离、处所和工具三类；有的是根据语义来分类的，在这种场合还存在着大量在严格意义上跟名词的格的形式相联系的意义和在严格意义上是属于邻近语汇的意义混淆不清的现象。

70

At least from the two mentioned studies of uses of the Latin genitive, it would appear (a) that some case uses are purely irregular, requiring as their explanation a statement of the idiosyncratic grammatical requirements of specific lexical items, and (b) that some semantic differences are accounted for independently of assigning 'meanings' to cases, either by recognizing meaning differences in 'governing' words or by noting meaning differences in different underlying sentences.

ラテン語属格の用法に関する前記二つの研究から少なくとも明らかなことは、(a) 格用法の中には完全に不規則なものもあるので、格用法の説明にあたっては、個々の語い項目に固有な文法上の必要条件を述べる必要があること、また、(b) いくつかの意味上の違いは、格に「意味」を付与することとは無関係に、「支配」語（'governing word'）における意味の違いを認めるか、もしくは異なる基底文における意味の違いを認めることで説明がつく。

上述两项关于拉丁语属格的研究工作至少可以表明：(a) 某些格的用法完全是不规则的，需要加以解释，要讲清楚特定的词汇成分各不相同的语法特点；(b) 某些语义上的差别并不是通过赋予格以某些“意义”来说明的，而是通过承认“支配”词中在意义上的差别来说明的，或者是通过考虑到在处于底层的句子中意义上的差别来说明的。

81

An example of the latter approach is found in the now discredited 'localistic' view of the cases in Indo-European, by which dative is 'the case of rest', accusative 'the case of movement to', and genitive 'the case of movement from'.¹⁰

後者の方法の一例は、印欧語における格の、今日では信用されていない「場所論的」見解（'localistic' view）に見受けられる。／それによると、与格は「静止の格」、対格は「～への移動の格」、属格は「～からの移動の格」である¹⁰。

后一种研究方法的例子可以举现在早已名誉扫地的关于印欧语的格的“方位”观点，根据这种观点，与格是“静态之格”，宾语是“运动所向之格”，属格是“运动所自之格”¹⁰。

125

1. 3. Case Histories

In addition to studies of case uses and interpretations of the cases in a given language as elements of a coherent system, the literature also contains many historical studies of cases; and these, too, are of various kinds.

1. 3. 格の歴史

格用法の研究、および、ある特定言語にあつて、まとまった体系の要素としての格解釈の研究とならんで、文献には格の歴史的研究も数多く載っているが、それらも多種多様である。

（三）格的历史

除了关于格的用法的研究和把特定语言的格作为内部一致的体系的成分来解释的研究以外，文献中还包括大量关于格的历史研究，而这些研究同样是各不相同的。

127

Still others have seen in the history of one case system a case system of a different type—with or without assumptions concerning the 'essential primitivity' of the earlier type.

ある格体系の歴史の中にある異なる型の格体系を認めた者もいる—ただし、その古い時期の型の「本質的原始性」(‘essential primitivity’) に関する仮定のあるなしにかかわらずである。

还有另外一些研究工作者从一种格的体系的历史中看到了不同类型的另一种格的体系，提出了关于早期类型的“本质原始性”的假设，或者没有提出这种假设。

132”
A second kind of speculation on historical changes within case systems traces case systems of one kind back to case systems of another kind.

格体系内の歴史的変化に関する第二の推論では、ある種の格体系をたどって別種の格体系にまでさかのぼる。

第二种关于格的体系内部历史演变的探索是从某一类格的体系追朔到另一类格的体系。

139”
1. 4. Case in Current Generative Grammar
A hitherto largely unquestioned assumption about case in the writings of generative grammarians has been made explicit by Lyons (1966, p.218): “case” (in the languages in which the category is to be found) is not present in “deep structure” at all, but is merely the inflexional “realization” of particular syntactic relationships’.

1. 4. 現代生成文法における格

生成文法学者の著作の中で従来ほとんど問題にされなかった格に関する仮定を、ライオンズ (1966, p.218) が明確にした。／すなわち、「(格範ちゅうが見出される言語においても)「格」は、「深層構造」にはまったく存在せず、特定の統語関係の屈折による具現形にすぎない」。

(四) 当前生成语法中的格

在生成语法学家的著作中迄今在大多数情况下没有人提出过疑问的关于格的一种

假设已经由莱昂斯（1966, p. 218）讲清楚了，他说：“‘格’（就有这种范畴的语言而论）根本不存在于‘深层结构’之中，而仅仅是特定的句法关系在屈折变化方面的‘体现形式’而已。”

162

2. Some Preliminary Conclusions

I have suggested that there are reasons **for** questioning the deep-structure validity of the traditional division between subject and predicate, a division which is assumed by some to underlie the basic form of all sentences in all languages.

2. 前段階における結論

一部の人がすべての言語のすべての文の基本形式の根底にあると考えられているような区分、つまり主語と述語の伝統的な区分が深層構造上の妥当性をもつということに対して、異論を唱えるのはもっともであると、私は示唆してきた。

二 几点初步结论

我曾经提出过，有理由怀疑关于主语和谓语的傳統区分法在深层结构中是否有效，这种区分法某些人认为是贯穿于所有语言的所有句子的基本形式之中的。

164

The kinds of observations that some scholars have made **about** surface differences between ‘predicative’ and ‘determinative syntagms’²¹ may be accepted without in any way believing that the subject / predicate division plays a part in the deep-structure syntactic relations among the constituents of sentences.

「述語」連辭（‘predicative’ syntagm）と、「限定」連辭（‘determinative’ syntagm）²¹の表層上の違いに関して数名の学者が出した所見は、主語・述語区分が文の構成要素間の深層構造上の統語関係において、いかなる役割も果たさないと考えても、受け入れられるものである。

可以接受某些学者提出来的关于表层的“谓语”和“限定结构段”（determinative

syntagm) 之间的区别。 / 但是这并不意味着也就相信主语 / 谓语这种区分法在深层结构句法关系中在句子的组成成份之间起什么作用。

165

Once we have interpreted 'subject' as an aspect of the surface structure, claims **about** 'subjectless' sentences in languages which have superficial subjects in some sentences, or reports **about** languages which appear to lack entirely entities corresponding to the 'subjects' of our grammatical tradition, no longer need to be regarded as particularly disturbing.

「主語」というものは、表層構造上の一つの局面であると解釈しさえすれば、文によっては表面上の主語をとる言語でも「無主語」('subjectless') 文が存在すると主張したり、われわれの文法的伝統の「主語」にあたる実体がまったく存在しないと思われる言語に関する報告があっても、もはや特にやっかいな問題だと考えなくてもよい。

一旦我们把“主語”解释为一种表层结构的现象，那么关于在某些句子中有表层主语的語言中有“无主語”句的说法，或者是关于某些語言看来完全没有和我們的語法传统中的“主語”相当的成分的说法，也就不必视为特别令人不安的了。

193

It seems to me that if there are recognizable intrasentence relationships of the types discussed in studies of case systems (whether they are reflected in case affixes or not), that if these same relationships can be shown to be comparable across languages, and that if there is some predictive or explanatory use to which assumptions **concerning** the universality of these relations can be put, then surely there can be no meaningful objection to using the word case, in a clearly understood deep-structure sense, to identify these relationships.

(格接辞の形で反映されているいなくにかかわらず) 格体系の研究で論じられているような、はっきり認められる文内部の関係 (intrasentence relationship) が存在するなら、また、これらと同じ関係が言語間に共通するということが示

されるならば、さらに、これらの関係の普遍性に関する仮定が利用できる何か予測的または説明的な使い方があるなら、確かな、このような関係を表わすために、明確に理解された深層構造の意味において「格」という語を使うことに対して、意味ある反論がでるとは、私には思えない。

我觉得，如果的确有在研究格的体系时讨论到的那一类可以辨认的句子内部关系（不管有没有通过格的词缀表现出来），如果能够证明这些关系跨越语言也是可以比较的，又如果关于这些关系到的普遍性的假设可以用来预测或解释某些情况，那么，在含义明确的深层结构的意义上使用格这个词去指这些关系，还要加以反对就没有意义了。

395

The interpretation of deverbal nouns which seems most satisfactory to me is that, except for the purely productive cases, the derivation of a noun from a verb is a matter of historical, not synchronic, fact.

私にとって最も納得がいくと思われる、動詞派生名詞（deverbal noun）に対する解釈は、あらゆる動詞に適用する場合を除けば、動詞からの名詞派生は共時的事実ではなく歴史的事実の問題である、とする解釈である。

我认为关于从动词变来的名词最令人满意的解释是，那些纯粹是能产型情况除外，从动词派生名词是一种历史现象而不是共时现象。

402

4. Some Remarks on Language Typology

The view of universal grammar which is emerging is something like this: In their deep structure, the propositional nucleus of sentences in all languages consists of a V and one or more NPs, each having a separate case relationship to the P (and hence to the V).

4. 言語類型論に関する所説

普遍文法の考え方が明らかになりつつあるが、それは次のようなものである。／どの言語もすべて、その深層構造において、文の命題核はVと一つまたはそ

解得正确的话，那么我在探讨的这些格的概念，连同这些格的概念的不同安排所决定的分句类型的设想，为确定这些语言中所发现的表层区别提供了范畴分类和图示分析方面的知识。

451

It is only by dint of considerable intellectual effort that the Westerner can achieve that liberation from familiar ways of thinking **about** language which is required for an understanding of the true character of Japanese.

西洋人が日本語の真の特性を理解するには、言語に関する通常の思考方法から脱け出すことが必要だが、それは、相当な知的努力をしてはじめて可能である。

要理解日语的真正特性，需要摆脱西方人关于语言的通常思路，而要做到这一点就必须在思想上付出巨大的努力。

459

One might refer to Oertel's study of the disjunct use of cases **in** Brāhmanic prose as a study of secondary topicalization. 56

二次的話題化の研究としては、バラモン散文における離接的用法 (disjunct use) に関する、エールテルの研究を挙げることができる⁵⁶。

有人可能会提到奥特尔 (Oertel) 关于婆罗门散文的格的分裂用法的研究是一种关于次级主题化的研究。

497

Lévy-Bruhl (1916, p.99) gives a persuasive example of this situation: Fijian *uluqu* means the head which is now firmly attached to my neck, while *kequ ulu*, also translatable as 'my head', would refer to the head which, say, I am about to eat.

レヴィ・ブリュールは、この状況について、説得力のある例を挙げている (1916, p.99)。／すなわち、フィジー語の *uluqu* は、私の首にしっかりついた首を意

味するが、*kequ ulu*も同じように「私の頭」と翻訳できるものの、たとえば、これは私がまさに食べようとしている頭などを意味するものである。

列维—布鲁尔举了一个关于这种情况的令人信服的例子 (Lévy-Bruhl, 1916, p. 99): 斐济语kequ ulu, 也可以译成“我的头”, 却是指, 例如, 我要吃的头。

502”

And Arapaho classifies ‘louse’ (or ‘flea’) among the inalienables (Salzmann 1965, p.139), a situation that invites people who like to speculate on these things to propose something or other on the Arapaho conception of ‘self’.

そして、アラパホ語 (Arapaho) では、「シラミ」(または「ノミ」)が分類上、分離不可能に入る (ザルツマン, 1965, p.139)。/これらのことについてあれこれ考えることの好きな人には、これはアラパホ族の「自我」(‘self’)の概念について、いろいろ提案したくなるような状況である。

还有,阿拉巴荷语 (Arapaho)把“虱子”(或“跳蚤”)列为不可分割的 (Salzmann, 1965, p. 139), 这种情况会使喜欢在这些事情上发议论的人对阿拉巴荷人关于“自己”的概念这个问题上提出这样那样的看法。

599”

Since the differences appear more and more to be differences on the level of surface structure, it may be advisable to wait some time before reaching any conclusions on these matters.

このような違いは表層構造レベルにおける違いであることが、ますます分かってきているようなので、これらの問題について結論を出すのは、しばらく待つほうが賢明であろう⁶⁴。

因为这种不同之点越来越显得表层结构层次的不同, 所以最好还是等待一个时期再作出关于这些问题的结论。

58	of	の	关于
70	of	に関する	关于
75	about	に関する	—
81	in	における	关于
125	of、 of	の、 の	关于、 关于
127	concerning	に関する	关于
132	on	に関する	关于
139	about	に関する	关于
162	for	に対して	关于
164	about	に関して	关于
165	about、 about	に関する	关于、 关于
193	concerning	に関する	关于
395	of	に対する	关于
402	on	に関する	关于
417	for	について	关于
427	of	に関する	关于
451	about	に関する	关于
459	of、 in	における、 に関する	关于
497	of	について	关于
502	on	について	关于
599	on	について	关于
647	of	の	关于

日常の卑近な物言いではむしろ使用が避けられる³ “关于” が独り気を吐いて翻訳を助けていることを窺うことができる。

3. 日本語由来の外来語としての“关于”

武信彰（2010）は“～于”型の介詞がおそらく談話機能を担う語群の欠を補うため中国現代書面語の形成の過程で生まれたものであると推定するが、5のconcerningに対応して用いられる“关于”は主語の前で句をなし、まさにこれ

3 相原茂（2003）。

に当たる。しかしながら、他の症例から明らかのように、主たる働きは文内部の連体修飾語の翻訳に向けられ、concerningにとどまらずabout, on, in, of, for等々に対応している。

英語の多様な表現が、日本語訳では「に関する(関して)」に集約される。「に對する(對して)」、「について」、「において」等はその言い換えにすぎず、英語の各語に対応しているわけではない。そして、中国語訳においてはさらにほぼ“关于”1語によって担われる。英語原文におけるconcerning, about, on, in, of, for等々が各々異なる意味と用法を具えるものであるにもかかわらず、これをほぼ“关于”1語によって受けるということは、英語から中国語へ直に翻訳した印象を与えない。日本語からの重訳によって英文原書の訳書を得たという、いわば系統発生にも似た過程を背景に重ねて見ることができよう。言い換えれば、日本語由来の外来語として“关于”を取り入れ、この範囲の表現に充てているという理解に導かれる。上述の英語語彙において、語釈が“关于”を訳語の一つに迎えているのは英漢詞典一般に見られるところである。⁴

concerning 关于.

Please inform me ~ this matter. 请把关于这件事的情况告诉我。

about 3 关于, 对于.

a book ~ ships 关于船舶的书

on 6 关于; 论及.

a report ~ the international situation 关于国际形势的报告

いくつもの語に対して語釈を与えるに当たってその都度「清代までの用例を検出しない」⁵ような新しい“关于”が訳語として思い浮かぶのはあまりに不自然だと言わざるを得ない。日本語からの借用を経てすでに定まっていたとの推論を否定するのは難しい。

本稿が分析対象とするのは20世紀も後半に入って上梓された英文の学術書と間もなく出版された邦訳書及び少し遅れて21世紀初頭に出た中国語版であり、

4 高永偉 (2009)。

5 太田辰夫 (1958) 254頁。

それらを対照することにどのような意義があるのかと問われるならば、この対照分析からだけからも、“关于”を日本語由来の外来語であると考えることの妥当性を確信することができるからである。

近代よりおよそ1世紀を経て英文から中文に訳出される過程において“关于”という語の存在は必須であり、同じ英文を翻訳した日文には同一箇所にも“关于”とただならぬ関連を疑われる「関する（関して）」を多く認めることができ、かつさらには“关于”が上述のように清代までの用例を検出されない、言い換えれば日本語からの重訳が盛んになされた時期を待って出現したという事実が存在する。ここから推せば、“关于”は日本語由来の外来語であろうと推定するのが自然な流れに基づく判断であると言わざるを得ない。

4. おわりに

自分たちが使用する西洋の概念は基本的には日本人が翻訳してくれたものなので、中国と西洋の間はどこまでも日本に遮られていると説く王彬彬（1998）の関心は、実詞にのみ向けられているけれども、実は実詞だけではなく品詞機能に伴う微調整を経て導入されている虚詞にも、またさらには文体への影響にも関心を寄せねばなるまい。

文献目録

- 相原茂（2003）「日中翻訳ルールをめぐって」、『日本中国学会報』第55集。
 太田辰夫（1958）『中国語歴史文法』江南書院。
 高名凱・刘正焱（1958）《現代汉语外来詞研究》文字改革出版社。
 高永偉（2009）《新英漢詞典（第4版）》上海譯文出版社。
 澤田田津子（1993）「日本語教育のための基本外来語について」、『奈良教育大学紀要（人文・社会科学）』42-1 225-239頁。
 武信彰（2010）「“～于”型の介詞について—“鑒于”を中心に」（単著）、『マテシス・ユニウエルサリス』第11巻第2号、257-270頁。
 武信彰（2014）「いわゆる「長すぎる」文についての予備的考察」（単著）、『マテシス・ユニウエルサリス』第15巻第2号、155-168頁。
 王彬彬（1998）〈隔在中西之间的日本—现代汉语中的日语“外来语”问题—〉、《上海文学》1998年08期 71-80頁。
 王立达（1958a）〈现代汉语中从日语借来的词汇〉、《中国语文》第68期。
 王立达（1958b）〈从构词法上辨别不了日语借词—和张应德同志商讨汉语里日语借词问题—〉、

《中国语文》第75期。

张应德 (1958) 〈现代汉语中能有多日语借词吗?〉, 《中国语文》第72期。

用例引用文献

Fillmore, Charles J. (1968) "The Case for Case". In Bach and Harms (Ed.) : *Universals in Linguistic Theory*. New York: Holt, Rinehart, and Winston, 1-88.

菲尔墨, C.J. (2002) 《“格”辨》, (胡明扬译) 商务印书馆。

フィルモア, チャールズ・J. (1975) 『各文法の原理—言語の意味と構造』 (田中春美・船城道雄訳) 三省堂。